

フランスの研究所と大学システム

稲賀 繁美

「フランスの研究所と大学システム」というのが、編集部から頂戴した課題だが、組織の改変が頻繁かつ例外だらけで離合集散するフランスの行政組織の全体像を描くことは、もとより筆者の能力を超える。また試みたところで、数年のうちに無意味になるだろう。

筆者は二〇一三年五〜六月に *Ecole pratique des hautes études* (EPHS) の招きにより、パリで一連の授業・講演を行った。招聘者は *Nicola Fievé*、日本庭園の研究者として著名だが、こ

の段階で Institut des hautes études japonaises の directeur だった。現時点では Collège de France にも席を得た Jean-Noël Robert がこの所長とも兼務となり、多忙を極めていた。なお事務所の住所は 45-47, rue des Écoles, 75005 だが、授業場所は 52, rue Cardinal Remoine, Instituts d'Extrême-Orient du Collège de France との記載があり、両者はまったく別の場所。教室は Salle Claude Lévi-Strauss。正直、筆者にはすでにこれらの複数の呼称の包含関係が詳らかでない。directeurs たちも役職の数だけ電子メールを持たされ、連絡不如意。おまけに指定された番地は、パンテオンの東側からパリ第七大学に下る急勾配の坂道の中途だが、そこには扉などなく、ローマ時代のパリの市の城壁に付属した敵めしい石造りの壁があるばかり。その一角で古い地図には載っていない impasse (行止まりの路地、名称失念) に折れ、その最初の左側の、表札もない、重くて開かない木の扉を無理やり押し込んで入らねばならない。入ると中には守衛が居て、誰何される。フランス人の聴衆も、最初どこが入り口が見つからなかった、と零していた。物理的にも書類上でも、きわめて煩雑。よほど事情通でなければ、蛮勇を鼓舞しても、とても教室まで辿りつけない。

にもかかわらず、授業には毎回三〇名を超える出席があり、四回目の最終回は五〇名近くに膨れ上がった。多忙のなかオギュスタン・ベルクさんやフィリップ・ボナンさんほかも来てくださり、日本の建築と空間という話題ゆえであろうか、現役の建築家で日仏を股にかけて活躍する面々も現れ、質疑応答も盛り上がった。場所こそ違いが、Collège de France 本部に招聘されて講演するよりこちらの方が気楽で、おまけに実質的には学者としてのフランスでの知的任務を果たせた。だが授業の内容はここでは措こう。受講生の博士論文準備学生は数人にすぎず、あとは他分野を含む研究者や一般市民だったことを付記しておきたい。

最近内装を改めたこの教室が面する中庭の向いには、ビザンチン研究所と図書室があり、その上階にはレヴィーストロス生前の執務室が位置している。教室を含む建物はあきらかにアール・デコ様式だが、その上階には中国・日本および韓国の研究図書館が併設されている。実はこうした基礎的な事情ひとつ、筆者は今回招聘されるまで、きちんと把握していなかった。東洋関係の宗教文献図書館は、遙かパリ市内西端に近い Av. du Président Wilson の Musée Guimet とは Place d'Iéna を挟んだ向かい側の建物にあつたはずなのだが、これらの図書館群の関係も筆者にはよく分らない。分らないといえば、レヴィーストロスの以前の書齋はギメ美術館別館上階の元風呂場に間借りした時代もあるとか。さらにルモワヌ街の図書館の最上階に上がってみると、廊下に沿って、他大学に属するはずの日本研究者の個人研究室が並んでおり、その奥の半円形の眺めの良い部屋は、かつては Collège de France の日本文明講座開設者、故 Bernard Frank の執務室だったが、今年には日本科学史研究の Anick Horinchi が使っているのだという。その窓の目前からは隣の Ecole Polytechnique の建物と中庭が眼下に臨まれ、その彼方に Collège de France 本部が Université Paris-Sorbonne の古風な建物と向かい合っていて遙かに佇んでいる。千年近い神学・学術の歴史がこの周辺の石造りの建築の錯綜の内に織り込まれていることになる。

すでに文字制限を超えており、Ecole des Hautes Études en Sciences Sociales (EHSS) あるいは筆者の専門である美術史の国立研究所 Institut national de l'histoire de l'art の沿革や仕組みに触れる余裕もない。前者には社会科学を中心に幾多の directeurs がおり(だから所長というよりは学術指導者)、日本研究所も rue Pierre & Marie Curie に存在する。後者は rue Vivienne の旧来の国立図書館隣の passage にあつた Université Paris Sorbonne の極東アジア研究所と

の共同企画もあり、筆者はこちらにも頻繁に招聘されている。研究者は相互に知人同士だが、組織上は縦割り乱立の傾向は否めない。パリですでにこの錯綜状態だが、フランスの日本研究に関係する研究者網については、*Bulletin de la Société française des Etudes japonaises* (SFEJ) に名簿がある。なお、アルザスの Centre européen des études japonaises en Alsace (CEEJA) がストラスブール大学とも密接な関係をもっており、英語圏や独語圏を含めた欧州の日本研究網において重要な役割を果たしている。また Maison franco-japonaise à Tokyo, Institut Franco-japonais à Kansai などの協力関係も、組織水準ではなお未開拓だが、日文研として将来深めてゆく可能性が残されているだろう。大学の日本関係の教育・研究については、稿を改めることとしたい。

(国際日本文化研究センター教授)

稲賀繁美

●著書

「執筆協力」[Okakura in the global Context]「日本再発見」「中国踏査旅行」「ベンガル知識人たちとの交流」「ミッションインポストン」「英文著作にみる OKAKURA」「天心のメディア戦略』『別冊太陽 日本のごころ』二〇九 岡倉天心 近代美術の師』平凡社 二〇一三年六月

●論文

「クールベ『石割り』の軌跡——政治と芸術」永井隆則編『フランス近代美術史の現在…ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』(初版第二刷)三元社 二〇一三年四月

「観光案内に載らないパリ案内(中)(下)——日曜日と月曜日、たった二日で廻れる、知られざる街中の秘境』『あいだ』二〇二・二〇三号(連載第九五・九六回) 二〇一三年四・五月

「非母語という類似餌(ルアー)には何が掛かるか」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学—多言語多文化のあいだ』三元社 二〇一三年六月

“Japanese Philosophers Go West: The Effect of Maritime Trips on Philosophy in Japan with Special Reference to the Case of Watsuji Tetsuro (1889-1960).” *Japan Review* No. 25, 2013.

「カタルーニャのジャポニスム——パロセロナ・カイシャ・フォーラムでの展覧会より(前)(後)」『あいだ』二〇六・二〇七号(連載第九七・九八回) 二〇一三年八・九月

●その他の執筆活動

「多国籍化する専門書店への羨望 パリの新刊書店にみる昨今の事情——書店の現在を考える(1)」『図書新聞』第三〇一一号(連載二二六) 二〇一三年五月

「なぜ台湾の誠品書店は元気がよいのか 日本の新刊書扱い大型書店に奮起を願う——書店の現在を考える(2)」『図書新聞』第三一一四号(連載一三七) 二〇一三年六月

「武術伝授について…カセム・ズガリさんとの対話から」『かみはま合気道』二〇一三年度版第一五号 三重大学合気道部OB会 二〇一三年六月

- 「水族館を思い出してみて」『小論文』（再掲）代々木ゼミナール二〇一三年第一学期
- 「韓国に比較文学の『辺境』を踏査するー国際比較文学会 第十九回ソウル大会（Aug. 15-21, 2010）の報告と反省」（再掲）『韓国比較文学会』第六〇号 二〇一三年六月
- 「洋書と和書の棲み分けを廃止しようー外国書の売り上げ落ち込みに日本の病理を探るー書店の現在を考える（3）」『図書新聞』第三一七号（連載一三八） 二〇一三年七月
- 「武術伝授について…カセム・ズガリさんとの対話から」（再掲）『赤門合気道』平成二五年度第五四号 東京大学合気道部赤門合気道倶楽部 二〇一三年七月
- 「日文研×地球研 座談会人文学がみる文化・社会・環境ーたとえば『おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか』について（井上章一・阿部健一・鞍田崇と）」『地球研ニュース』No. 3 二〇一三年七月